

(日本における) オンライン学術定期刊行物  
の将来と J-STAGE の役割

What will J-STAGE do in the future online  
scholarly communication in Japan

土屋俊 (Syun Tutiya)

大学改革支援・学位授与機構 (NIAD-QE)

2020 年 2 月 13 日

## おおよその内容

- 一応、1990年代後半を歴史的過去として思い出しておこう
  - ▶ 世界の事情 ⇒ 急速に変化
  - ▶ 国内の事情 ⇒ 急速に変化に耐えられないほど保守的
- 初期 J-STAGE
- オープンアクセスの登場
- 今
- 未来
  - ▶ 超悲観的未来
  - ▶ 保守的未来
  - ▶ 一見明るそうな未来
  - ▶ 未来を決める要因

## 1990年代に起きたこと: 「世界」で

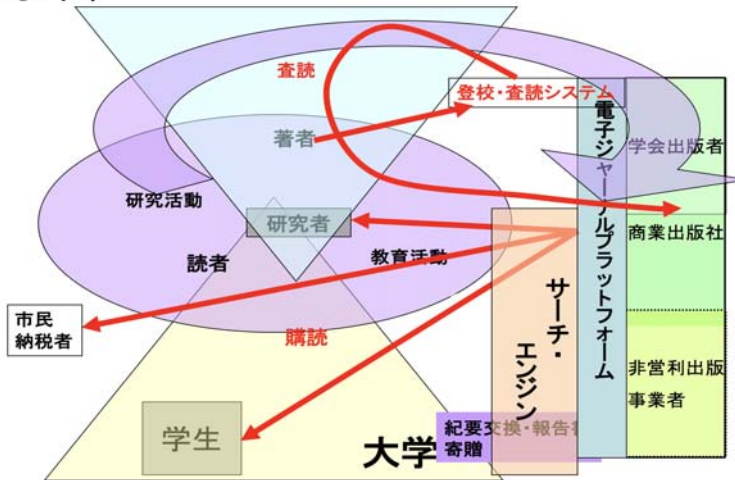
- 商業出版社大手の寡占化
- インターネットの展開と商業出版社大手の電子化
- プレプリントサーバと<sup>1/12</sup>ターネットへの「不信」
- “Serials Crisis” (欧米版/日本版)
- 最初の“Flip” (印刷媒体と電子媒体)の兆し

## 1990年代に起きたこと: 日本の事情

- 日本版シリアルズクライシス
- 「代理店」と「黒船」論
- 大学内部における図書館の位置づけ
- 「電子図書館」助成

# 2006年段階のイメージ

つまり、



## J-STAGE の登場

- NACSIS の電子図書館
- さまざまな圧力? いずれにせよ印刷体モデルの電子版にすぎなかった
- 技術的未熟
- 「印刷会社」の技量とコスト
- 利用者は、運営にも口を出さない、出させない
- 印刷会社の支配
- 「電子」投稿システム
- 抜刷 (off-prints) 収入の維持
- 図書館コンソーシアムとの関係

# オープンアクセスの登場

- 実態としてのオープンアクセスとインターネットへの不信
- Budapest Open Access Initiative の 理念
- SPARC の変心
- 図書館の介入: オープンアクセス・レポジトリ

## オープンアクセスの世俗化

- メガジャーナルの成功 (?)
- エンバーゴ明けにあっさり
- APC の「ビッグディール」⇒ 第2次フリッピング
- 国際的学術雑誌出版者のプラットフォームビジネス化  
(Elsevier:Mendeley(2013年)、SSRN(2016年7月)、  
Plum Analytics(2017年2月)、bepress(2017年8月)、  
Aries(2018年9月))



## 今や日本唯一のプラットフォーム

- 世界に冠たる出版プラットフォーム?:(昨年3月での測定)
  - J-STAGE: 2780 タイトル、4,808,650 論文
  - Atypion: 2,200 学会、200 出版社、英語刊行論文の45%
  - SciELO: 1,285 タイトル、745,182 論文
  - HighWire: 513 タイトル 7,659,003 論文
- オープンアクセスには実態とシンパシーで応える。
- デフォルトで JALC DOI 付与。でもその他の ID の行く末はこれから
- 規模、地力の差
- 非会員投稿
- NACSIS ELS の廃止
- 著者とも読者とも、すべて学会経由

# 超悲觀的未来

- J-STAGE への予算配分が正当化できなくなる
- J-STAGE は会費で運用する
- 会費を払えない利用者は利用できない(当り前) ⇒ 費用が足りなくなり、消滅する。⇒ 会費を払えた利用者も、個別には負担ができなくなり、商業出版社・非営利出版社とパートナーシップを組まないと出版できなくなる。

## 保守的未来

- J-STAGE は、日本の学会のための基礎的な学会出版プラットフォームとしてなんとか維持される。
- 各学会は負担できる費用の範囲で、講読モデルか APC モデルかなどの選択をしてプラットフォームを利用する。
- 必要なサービスが用意され、あるものは無償で、あるものは有償で提供され、学会は必要と資金力に応じて選択して利用する。

## 一見明るそうな未来

- J-STAGE は、日本の学会のための基礎的な学会出版プラットフォームとして強化される。
- 各学会は負担できる費用の範囲で、講読モデルか APC モデルかなどの選択をしてプラットフォームを利用する。
- すべてのサービスは無償で提供され、学会は必要に応じて利用する。

## 未来を決める要因

- そもそも、「定期刊行物」という概念はいつまで維持されるのか。「定期」? 「刊行物」?
- そもそも、成果発表はなぜするのか? しなければならないのか (もちろん、知識の増進のためには必要だが。身内で困りこんでしまったっていいではないか)
- そもそも、完結した論文という概念はいつまで維持されるのか。
- そもそも、「論文業績による採用、昇任」という制度はいつまで維持されるのか。
- 発展途上国からの論文発表は今後どこまで増えるのか。その刊行に要する費用は誰が負担するのか。(Global South 問題: Joachim Schöpfel and Ulrich Herb (eds.) *Open Divide: Critical Studies on Open Access*, 2018)
- 分野ごとに異なるにせよ、学術コミュニケーションだけを切り離しては方向性は見えない。(データのこともあるので) 研究活動全体での位置づけの必要性。